

②論文要旨（博士後期課程）

論 文 要 旨

申請者氏名 康 乃琪

申請学位 博士（言語教育学）

主論文題目

中国人日本語学習者による特殊拍の生成について
一句レベル、文レベルを中心に—

主論文要旨（邦文は4,000字以内
外国語は2,000語以内）

本論文は日本語のリズムの等時性に着目して、音連続、文における特殊拍の生成を論じたものである。

日本語のリズムは、「日本語らしさ」に関わる重要な音声要素の一つであり、学習者にとって習得が容易でない項目である。日本語のリズム生成に影響を与える要因の一つは、等時性が身に付いているかいないかである。拍の持続時間に関する従来の研究には、語単位における特殊拍の生成や聞き取りの傾向を探るものが多く見られるが、本論文で扱う「等時性」とは、各モーラがほぼ同じ持続時間で発音されるだけではない。特殊拍を含む音節は、音連続に位置する場合も、文に位置する場合も、同じ持続時間の比率を持ち、発音されるということである。したがって、特殊拍が音連続や文に置かれる場合、学習者の発音の傾向や、特殊拍の生成にどのような影響があるのか、どのような要素に関わるのかを解明する必要がある。

本論文では、まず、テーマに沿った会話調査を通して、文における特殊拍生成の問題点について考察した。その結果、特殊拍の生成は、文が複雑になり長くなるに伴い、難易度が高くなることが明らかになった。また、連続する絵カードを利用した発話調査を行い、短文から長文、さらにリズム構造が複雑になる文や文連続において特殊拍の生成にはどのような特徴が現れるのかを明らかにした。その結果、単文より文連続における特殊拍生成の難易度が高く、生成の難易度は、「撥音拍<長音拍<促音拍」という順に高くなることが分かった。

さらに、読み上げ調査を通して、音連続、文において特殊拍の生成がどのように影響を受けるか、またその要因について考察した。その結果、音連続や文の長さや複雑さ、文における位置、前後の音環境のリズム構造が要因であることが明らかとなった。

以上の調査から、音連続、文に位置する特殊拍の時間制御が難しいのは、リズムの再構造化と調音器官の緊張度の調整が容易でないことが原因であることを検証した。発話に際して、脳は正しい音声情報を瞬時に調音器官に伝達することで、調音器官は最適な緊張度を選択し音声生成を実現する。日本語母語話者は、日本語の各音声要素を適切に制御調整し発話に繋げることが出来るが、中国人学習者は、日本語音声の情報処理が追い付かず、適切な再構造化ができなくなり、拍の等時性にも対処できない。

そのうえ、中国語の音節構成及び声調の影響があるため、声調のパターンにより音節の持続時間が変化する。したがって、モーラリズムにおける拍の等時性を適切に制御調整できなくなり、語単位では情報処理が比較的上手く行われても、音連続や文になると音環境が複雑化し持続時間が変動するため、特殊拍生成の難易度も上がってくる。

読み上げ調査の結果に基づき、それぞれ異なった一連の音連続で特殊拍の持続時間を測定・比較し、リズムの等時性を実証した。

その結果、特殊拍を含む語を違う長さの音環境に置いても、その語にある特殊拍は一定の

比率で持続時間を保って発音され、語の持続時間長に占める比率がほぼ変わらないことが証明された。発話は、速度、ポーズなどの影響を受けるが、モーラ数が同じであれば、音節数や音環境が異なっても（相対的であるが）同じ長さの持続時間を保つことは、日本語母語話者は認識している。それに対して、中国人学習者は母語干渉により、音環境が変わるに従い、持続時間の制御が不安定になることが分かった。この調査結果からも、音声学習や音声指導は、語単位の学習や指導では不十分であるということが考えられる。

リズムは言語音声の中でも重要な要素であり、また、第二言語習得においても、初級者から上級者まで習得に努力を要する項目であると言える。リズムの習得は、語単位だけの習得だけではなく、対象となる語をより複雑な構造に置いて練習していかないと、正しい発音を定着させるのは難しい。本論文では、音声指導について、リズムの指導が重要である点、語単位の指導だけでは足りないことが分かった。学習、指導すべき発音を様々な音環境に変えて練習する方法を推奨し、音声教育上の一助とすることを旨とするものである。

第1章 序論

第1章では、日本語教育の現状、音声教育の重要性及び学習者の音声学習に対するニーズ、そして本研究の目的と意義について述べた。

第2章 先行研究

第2章では、先行研究における言語リズムの考え方、定義について紹介し解説した。次に、本論文の研究において理論的支柱となる VTS について述べた。そして、中国人日本語学習者の例を中心に、特殊拍の知覚・生成に関する先行研究を概観して、特殊拍習得について、明らかになっている点、課題として残っている点を整理した。

第3章 会話における特殊拍の生成

第3章では、テーマを定める形で会話調査を通して、文における特殊拍生成の問題点について考察した。

第4章 視覚情報を用いた発話における特殊拍の生成

第4章では、第3章の調査結果を踏まえ、連続する絵カードを利用した発話調査における特殊拍の生成にどのような傾向が見られるのかを考察した。

第5章 音連続、文における特殊拍の生成調査

第3章と第4章の予備調査の結果に基づき、中国人日本語学習者を対象に読み上げ調査を行い、音連続や文により特殊拍の生成がどのように影響を受けるかについて、またその要因について考察した。

第6章 音連続、文における特殊拍の生成調査の結果

第6章は第5章の読み上げ調査の結果を示した。特殊拍の生成は、語などの短い音連続より文で難易度が高くなる。特殊拍生成に影響する要因は、位置する音連続や文の長さや複雑さ、文における位置及び前後音環境のリズムの影響という3点であることが分かった。

第7章 音響分析における特殊拍持続時間の測定と比較

第7章では、それぞれ異なった一連の音連続で特殊拍の持続時間を測定し、比較検討した。同じ音節であれば、短い音連続や長い文においても等時性を保ち、同じ時間長の比率で発音されることを証明した。それに対して、中国人日本語学習者は、中国語の声調や音節構造の影響を受けるため、等時性を維持するのは容易ではないことが分かった。

第8章 結論

第8章では、第3章、第4章と第5～6章の調査結果をそれぞれ照らし合わせ、日本語のリズムにおける等時性を考察した。また、VTS の観点から本研究全体の結果を考察し、リズム教育の指導方法について提言した。